

打撃大特集●動作解説／基礎ドリル／実戦に生きる練習掲載!!

小学生球児、指導者&保護者の入門書

学童野球

Magazine

vol.04

ベースボールマガジン社発行
ベースボールクリニック
8月号増刊

動画連動



育成&練習法を
満載!!

打つ喜びよ、 永久に

巨人アカデミー

目的&段階別8ドリル

話題の飛ぶバット
「レガシー」に迫る

最前線の現場ノウハウ

東16丁目フリッパーズ[北海道]

東川大雪野球少年団[北海道]

町田玉川学園少年野球クラブ[東京]

平戸イーグルス[神奈川]

Bimonthly Focus

夏の全国2大会 展望

U-12侍ジャパン 健康診断

プロフェッショナルの原風景
貫く意思

佐藤輝明

[阪神]



人が人を教えながらまた育つ。

球界にも還元ルートを開拓中

白坂 琢 (49)

芝浦工業大学柏中学高等学校
中学軟式野球部監督

千葉・芝浦工大柏中の軟式野球部を率いて19年目になる野球人。新型コロナウイルスの影響が和らいだ今年5月5日、同校のグラウンドを幼児・児童に開放するイベントを開催した。これが盛況。参加者らの笑顔とともに、スタッフとなって活躍する野球部員たちのやる気も引き出す穏やかな笑顔は、広く野球界に向けられている。決して目立つ活動ではない。が、止まらない野球人口減少の歯止めとなるのは、こうした取り組みなのではないか――。

野

球人口の減少が叫ばれて久しい。わずか10年ほど前、

1万5000近くあった全日本軟式野球連盟登録の学童チーム数は、いまや1万と少し。危機的状况――。原因はさまざまに取りざたされている。少子化はもちろん、ボール遊び禁止の公園、昔ながらの怒声・罵声がびこるチームの

在り方、さらには家庭環境の変化まで。おそらく、そのどれもが、少なからず正しい。

こうした現実を受け、プロからアマチュアまで、野球関係団体は子どもたちの「野球離れ」対策を講じ始めている。ファンサービスや野球教室などのイベント開催、そして指導者育成やルール改正と、形も規模もさまざまだ。今年5月5日、「こどもの日」、千葉県

柏市の芝浦工業大学柏中学高等学校で、未就学から小学生までの児童にグラウンドを開放し、自由に遊んでもらおうというイベントが行われた。いわゆる「施設開放」の取り組みは他でも見かけるが、その主体が中学校の野球部というのは珍しい。

「いまや公園も、ボールやバットを使った遊びを禁じる場所ばかり。気兼ねなく、そうした遊びに取り組める場を



白坂先生が発案し、中学野球部員が運営した「人工芝グラウンドで遊ぼう!!」より(5日5日、芝浦工大柏中)

提供したいというのがひとつ。同時に「野球離れ」と言われる現状を、野球部員たちに肌で感じてもらいたいといった気持ちもあります」

発案者である同中学野球部の白坂琢監督は、そう説明する。

グラウンドにはトランポリンや縄跳び、フラフープなど、野球らしくない器具も多く並び、「これをきっかけに野球を始めてほしい」といった強いメッセージは感じられない。野球部員たちも「友達ボール」や「リアル野球盤」などの、いわゆる「ベースボール型」ゲームの説明役や補助役として活躍するが、野球を教えるというよりは、あくまでも黒子だ。

野球のためというよりも、「遊び」の場としての空気が心地良い。イベントは盛況のうちに終了、参加した幼児・児童は皆、とびきりの笑顔で会場

を後にした。大役を終えた部員たちは後日、自主的にミーティングを開き、反省とともに次回開催に向けて意見を出し合ったという。

想像していたほどには野球色が濃くない、中学生によるイベント。少し不思議な気持ちで、あらためて白坂監督に話を聞くと、その大きな視点に気づかされる。スポーツ遊びという、大きな枠の中の野球の存在。そして「野球人」として、参加者の反応や気づきについて話し合う部員たちを見守る、客観的な立ち位置……。

日体大までプレーを続けた後、上越教育大の大学院ではバッティング力学を学び、芝浦工大柏高の教諭、そして野球部監督に。野球一色ともいえる経歴を持つ白坂監督だが、その視点は「野球中心主義」のそれではなく、極めてニュートラルなのだ。

こんなエピソードがある。芝浦工大柏高校赴任と同時に、硬式野球部の監督に就任した白坂監督は、その3年後に、事故で入院・休職。復職時に、高校野球部の監督を後継に託し、自身は同中学野球部の監督に就任する。

「どんな年代の野球であっても、野球でさえあれば、僕には楽しく感じられるんです。プロや社会人野球はもちろん、学生野球も少年野球であっても。高校野球部の監督にはやりがいがあり



どんな年代であっても、
野球でさえあれば、
僕には楽しく感じられるんです

しらかさ・たく 1972年、東京都生まれ。小学生のときに小金井キングジャガーズで野球を始め、中学時代は軟式クラブの小金井野球クラブでプレー。豊多摩高を経て日体大へ。指導者を志し、卒業後は上越教育大大学院のバイオメカニクス研究室でバッティング力学を研究。25歳で芝浦工大柏高に赴任し、現在は同中学・高校の5学年で保健体育を教えながら、中学の軟式野球部監督を務めて19年目

ますが、それは後輩に任せ、僕は中学で選手を育て、高校に送り出す形にしたほうが良いと思えて」

以来、同中学の野球部で指導に当たって20年になるうとして。その一方で、市選抜チーム「ALL柏」でも長く指導に当たってきたが、こちらも「いまはほとんど現場には関わっていません」と話す。

「選抜チームの指導はすごく楽しかったです。良いチームづくりができて、全国レベルの大会で好成绩も収められました。ただ、だからこそ、自分が長く職に留まるべきではないと思えたんです。もっと多くの先生に、この経験をしてほしい、と」

そんな立場であれば、長く固執する人のほうが多そうだが、そのすべてを後継に託し、自身はあっさりとして「野球部監督」の立場に戻るのだ。

かつて「ALL柏」でプレーしたOBがこう断言する。「柏の中学野球出身者で、白坂先生のことを悪く言う人はいないと思いますよ」。

偉ぶることなく、常に選手ファーストの指導で、多くの野球人を世に送り出し、イベントでは幼稚園児と一緒にボールを追いかける。白坂監督はこれからも肩肘張らず、その大きな「野球愛」を、子どもたちに伝えてゆくのだらう。